

# 現代家庭事情における生活科「家庭生活」「自分自身」 を題材にした学習の取扱いの考察

*Consideration of Handling in Home Circumstances  
of a Lifemaking Course “Home Life” and “Oneself”*

鎌倉 博 *KAMAKURA Hiroshi*  
(人間発達学部)

## 1. 本稿のねらい

小学校の教科学習生活（以下生活科）において、「家庭生活」及び「自分自身」は大事な学習内容として位置付けている。その具体的な学習は家庭の協力なしには深まらない。しかしながら近年、複雑な親子関係や家庭環境が問題になっている。こうした現代的家庭事情を踏まえて、いかに「家庭生活」及び「自分自身」の学習を展開していけばよいのかについて論考する。

## 2. 生活科における大事な題材としての「家庭生活」「自分自身」

「家庭生活」及び「自分自身」を題材とする位置付けを、小学校学習指導要領 第2章 各教科 第5節生活（以下 要領 と略す） 第2各学年の目標及び内容 において確かめる。1. 目標 (3)では、

(3) 自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気づき、意欲と自信をもって生活するようにする。

とされており、2 内容 でも具体的に(2)(9)において、

(2) 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。  
(9) 自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。

とあり、「家庭生活」及び「自分自身」は、生活科の大切な学習題材になっている。

### 3. 教科書における「家庭生活」の扱い

#### (1) 単元としての取扱い

2019（令和元）年度に発行されている生活科教科書は、2014（平成26）年検定済みの教科書<sup>1)</sup>で、学校図書（以下G社と略す）、教育出版（K社）、啓林館（Ke社）、信州教育出版（S社）、大日本図書（D社）、東京書籍（T社）、日本文教出版（N社）、光村図書（M社）の計8社（アイウエオ順）である。以上8社の生活科教科書に基づいて、「家庭生活」を題材にした学習活動を意識して構成したと考えられる単元を拾い出してみる。

G社	ありがとう いっぱい	上巻 p. 96-105
K社	かぞく にこにこ 大きくせん	上巻 p. 80-89
Ke社	ひろがれ えがお	上巻 p. 70-79
S社	わたし と かぞく	下巻 p. 84-89
T社	じぶんで できるよ	上巻 p. 79-89
D社	なつは たのしいことが いっぱい いろいろ あるね、ふゆの ぐらし かぞくで いっしょに おしょうがつ	上巻 p. 48-49 上巻 p. 88-89 上巻 p. 92-93
N社	いっしょにいと あんしん	上巻 p. 104-111
M社	みんなの にこにこ だいさくせん	上巻 p. 84-95

各社で扱いは様々である。

7社の教科書では、大単元として「家庭生活」を集中的に取り扱おうとしている。一方でD社だけは、季節ごとの家族の触れ合いを示す形で分散的に取り上げる扱いになっている。

また、S社を除いては上巻で扱っている。一般的に上巻は1年生が使用するので、S社だけが2年生で扱うようになっている。

単元名は、その単元における最終的な学習目標を象徴していることが多い。その点で見ると、「ありがとう」という感謝、「にこにこ」「えがお」「あんしん」「たのしい」という明るい家族像の構築、「いっしょ」という絆に帰結する学習活動が期待されていると言える。

#### (2) 「家族」である対象

先に挙げた掲載頁に限定し、そこに掲載されている写真と絵を基にして、「家族」の構成員として描き出そうとしているものを列記してみる。ここで「家族」というものをどのように見、とらえさせようとしているかの編集社の意図が見えてくる。なお、「父」「祖母」等を特定した基準は、表現されている写真や絵から一般的な解釈に基づく筆者の判断による。

G社	K社	Ke社	S社	D社	T社	N社	M社
自分	自分	自分	自分	自分	自分	自分	自分
兄弟妹	弟妹	弟	弟妹	姉	兄弟姉妹	姉弟	兄弟妹
父	父	父	父	父	父	父	父
母	母	母	母	母	母	母	母
祖父	祖父	祖父	祖父	祖父	祖父	祖父	祖父
祖母	祖母	祖母	祖母	祖母	祖母	祖母	祖母
愛犬			愛犬			愛犬	愛犬
							愛猫
山羊							

まず注目したいのは、8社ともに3世代を意識して「家族」を描き出そうとしていることである。ここには「家族」の定義として、「兄弟姉妹を含む自分達世代」「父母世代」、離れて暮らしていたとしても「祖父母世代」までを「家族」としてとらえようとする考えがあるものと思われる。念のため、小学校学習指導要領解説 生活編（以下、要領解説書と略す）で確認したが、「家族」を定義する解説は見当たらなかった。ならば、8社ともに3世代を意識して「家族」を描き出そうとしているのは、各社のとらえた「家族」像ということになる。

次に注目したのが、K社、T社、N社の教科書では、日本人と外見上の特徴を異にする子や親子が、写真で掲載されていることである。国籍の違う同士の父母の間で生まれた子、海外から移住して日本に住んでいる親子なども、日本の中の「家族」として理解できるように掲載したものと思われる。

D社を除いては、「兄弟姉妹」の一員として乳幼児の写真または絵を掲載している。「祖父」「祖母」で見ると、同居していると思われるケースと、離れたところに暮らすケースが見られる。D社は両ケースを掲載している。また、N社は車いすの「祖母」の絵、K社は同じく車いすの「母」の写真を意図的に入れたものと思われる。これらは、生活科の第3の2にある「身近な幼児や高齢者、障害のある児童生徒などの多様な人々と触れ合うことができるようにすること」を、「家族」の中でも見るように考えて入れ込まれたものと推察される。

さらに目を引いたのは、「愛犬」「愛猫」「(恐らく家畜としての)山羊」の写真や絵である。表に含めなかったが、T社の中にも犬が掲載されている(p. 80)。しかし、1枚の絵の中で部屋の中外でいる場所が違うことと、互いにその存在を意識しているように描いているとは思えなかったので、「家族」としての上記表には含めなかった。ところが、「愛犬」と表記した教科書では、「ポチと おこもり したよ」(S社 p. 85)「ポチの せわ」(S社 p. 86)とわざわざ表記(同 p. 86)している他、紐につないで一緒に散歩する写真(N社 p. 106)、ボールで一緒に遊んでいると思われる絵(M社 p. 86及び91)を掲載している。「愛猫」と表記したのは、「いえの ひとは、どんな ときに にこにこして いるかな」と表

記されたページに猫の絵（M社 p. 88）があったためである。さらに、G社は、8家族の「えがおが いっぱい」の写真に掲載している隙間に、世話をされたためにきれいに見えているのだと思われる山羊と犬（p. 104及び105）の写真に掲載している。これらには、近年愛情かけて毎日を共に暮らす動物を、「家族」の一員として見なす傾向を反映させようとしたものと推察される。

日本人と外見上の特徴を異にする子や親子、家族の中に入る介護が必要な乳幼児・高齢者・障害者、そしてペット動物を「家族」として描き出そうとしているのは、近年の「家族」の定義の多様化を反映していると言える。

### (3) 「家庭生活」で何を学ぶか

再び2014（平成26）年検定済みの教科書に掲載されている写真、絵、コメント文などを参考にして、どのような「家庭生活」に着目させようとしているかを見ることにする。

#### ① 学習活動として映し出している内容

	G社	K社	Ke社	S社	D社	T社	N社	M社
毎日していることを伝え合う		○						
家族を喜ぶときを思い出す		○						○
家族の1日を書く						○		
家族の仕事発見カードを書く	○	○				○		
やってみる（ニコニコ大作戦）	○	○				○	○	○
できたことを記録する								
お仕事カレンダーをつける	○	○						
やってみたことを書く							○	
続けられそうなことを書く				○			○	
家族の作文を書く				○				
家族の笑顔を書く			○					
お礼の手紙を書く		○	○				○	
どんなことをしたか伝える		○	○	○			○	○
みんなの前でやってみる							○	○
家族で使えるものを作る					○			
家族から手紙をもらう		○	○					

家族がしている仕事、家族によって自分が支えられていることに気づかせることを通して、「家事」や「規則正しい生活」のあり方に関心を持たせようとしている。そして、生活科の学習内容(9)と絡めて、家庭生活における自立を促し、家族の中での役割をもってその仕事を日々の欠かさぬ仕事として家族の役割を自覚的に担わせること、また日頃支えてくれている家族に感謝の気持ちが持てることをねらいとしていることが分かる。

## ② 家族一緒に取り組み姿やの団らんの姿を映し出している内容

	G社	K社	Ke社	S社	D社	T社	N社	M社
挨拶する						○		○
お見送りする							○	○
お茶を届ける、差し入れる							○	
一緒に歯磨きする						○		
一緒に遊ぶ			○	○				○
一緒に演奏する				○				
一緒に買い物する		○		○	○			
一緒にお料理する	○			○	○		○	
一緒に食べる	○	○	○		○	○	○	○
一緒に洗う			○					
一緒に畳む	○		○				○	
一緒に片づける					○			
一緒にお掃除する	○	○			○		○	
一緒にお世話をする			○					
一緒に出掛ける							○	
家族写真を撮る	○							
みんなでお祝いする		○						○
贈り物をする				○				○
お手紙を書いて贈る		○			○			
応援する				○				○
学校のことを話す						○		○
具合を見てくれる		○		○				
車いすの家族を助ける		○						
顔見せ、お見舞いに行く							○	
肩たたきする				○				
帰りを心配して探す				○				

家族みんなが笑顔になれるように取り組んでいる姿や一緒に楽しむ姿に着目させようとしている。

## ③ 規則正しい生活の姿、家事をする家族を見つめたり自分で挑戦したりしている姿として映し出している内容

	G社	K社	Ke社	S社	D社	T社	N社	M社
起きる		○	○			○	○	○
布団畳み						○		
歯磨き		○	○			○		○
着替え		○	○			○		
トイレに行く			○			○		

新聞をとる				○				
食事の前のテーブル拭き								○
食事や食器を運ぶ並べる	○			○		○	○	○
料理する	○		○				○	
野菜を漬ける	○							
食事							○	○
食事後の片づけ						○		
食器洗い				○				
ゴミ出し			○	○		○	○	
手洗い、うがい						○		
プリントを出す							○	
回覧板を届ける			○					
おやつを食べる						○		
留守番する				○				
下の子の世話		○	○	○		○		○
愛犬の世話				○			○	
花に水やり	○							
買い物する						○		
部屋の片づけ	○		○	○	○	○		
掃除					○	○	○	
風呂掃除	○						○	○
雑巾がけ				○				
靴を並べる			○			○	○	
靴洗い	○					○	○	
洗濯物を干す	○			○			○	
洗濯物を畳む	○					○	○	
アイロンがけ				○				
勉強		○	○			○		○
作ったものを見せる				○				
明日の用意をする			○	○		○	○	○
お風呂に入る						○		
寝る			○			○		○
健康に過ごす								○

「起きる」から始まり「寝る」に至るまでの1日の生活の姿に関心を持たせ、規則正しく過ごせる自覚的な過ごし方を促すとともに、「家事」が具体的にイメージ出来て、家族に喜ばれるやり方で工夫して取り組めるように促していると言える。

#### 4. 教科書における「自分自身」の扱い

##### (1) 単元としての取扱い

「家庭生活」同様に、2019（令和元）年度に発行されている8社の生活科教科書に基づ

いて、引き続き「自分自身」を題材にした単元を拾い出してみる。

G社	もうすぐ 2ねんせい みんな 大すき わたし 大すき	上巻 p. 106-115 下巻 p. 96-111
K社	もうすぐ 2年生 あしたへ ダッシュ	上巻 p. 100-108 下巻 p. 84-92
Ke社	もうすぐ 2年生 これまでの わたし これからの わたし	上巻 p. 104-115 下巻 p. 86-100
S社	わたしたちの 1ねんかん 大きく なった わたし	上巻 p. 102-108 下巻 p. 90-100
D社	もうすぐ 2年生 自分 はっけん	上巻 p. 110-115 下巻 p. 88-111
T社	もうすぐ 2ねんせい あしたへ ジャンプ	上巻 p. 101-110 下巻 p. 90-102
N社	大きく なったね 1ねんかん わたしの すてきが はばたく	上巻 p. 112-121 下巻 p. 96-113
M社	もうすぐ みんな 2ねんせい ひろがれ わたし	上巻 p. 96-103 下巻 p. 82-93

まずは、各社ともに上巻下巻で扱っており、1年次でも2年次でも意識的に「自分自身」に目を向けさせようとしていることが窺える。ここには、要領「3 指導計画の作成と内容の取扱い」1(2)に書かれている「児童の発達の段階や特性を踏まえ、2学年間を見通して学習活動を設定すること」とともに、要領解説書 第1章総説 3 生活科改訂の要点(1)目標の改善に書かれている「答申において、自分の特徴や可能性に気づき、自らの成長についての認識を深めることが重要である旨が提言され」たことが意識化されたものと推察される。「答申」というのは、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」<sup>2)</sup>のことである。その答申の 第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性 第2章 各教科・科目等の内容の見直し 6.生活 (2)具体的な改善事項 ③学習・指導の改善充実や教育環境の充実等 1)「主体的・対話的で深い学び」の実現に「振り返ることで自分自身の成長や変容について考え、自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性に気付いていく。自分自身への気づきや、自分自身の成長に気付くことが、自分は更に成長していけるという期待や意欲を高めることにつながる。」に影響されたものと考えられる。

## (2) 「自分自身」で何を学ぶか

再び2014(平成26)年検定済みの教科書に掲載されている写真、絵、コメント文などを参考にして、「自分自身」を題材にどのような学習活動に取り組むのかを見ることにする。

	G社	K社	Ke社	S社	D社	T社	N社	M社
体験した1年間を振り返る	○	○	○	○	○	○	○	○
できるようになったことをまとめる	○	○	○	○	○	○	○	○
学習発表会、ありがとう発表会をする				○	○	○	○	○
新1年生を招待しよう	○	○	○			○		○
新1年生を迎える準備をする	○	○	○				○	○
どんな自分になりたいかを考える	○	○	○		○	○	○	○
自分が成長してきた姿を調べる、伝える	○	○	○	○	○	○	○	○
自分のすてきなところを探す、伝える		○	○		○		○	○
みんなのすてきなところを発見する、伝える	○				○	○	○	○
感謝の気持ちを伝える	○	○	○	○	○	○	○	○
家族やお世話になった方から手紙をもらう				○	○	○	○	○

入学後ないしは生まれてからの成長を「振り返る」、そしてその振り返りを通しての成長に関わってきた周囲の人々に「感謝する」活動を、8社共通して扱っている。また、これらの学習活動を通して未来への夢にも目を向け「どんな自分になりたいか」を7社が考えさせる内容を扱っている。

また、先の「答申」<sup>2)</sup>にもあったように「自分は更に成長していけるという期待や意欲を高める」ことをねらいとしたものであると推察できる「自分のすてき」「みんなのすてき」に着目させようとしている。その際、挿絵や写真の中に外国籍と思われる子（G社、K社）、車いす生活の子（Ke社）も、「みんな」の中の一員として取り上げられていることにも注目しておきたい。

## 5. 「家庭生活」「自分自身」の学習における課題

### (1) 「家族」「自分自身」を取り上げることでの今日的検討課題

#### ① 現代日本社会の中での現実的「家族」の多様化

要領解説書 第3章生活科の内容 第2節生活科の内容 (9) では、「活動によっては、児童の誕生や生育にかかわる事柄を扱ったり、家族へのインタビューを行ったりするような場合も考えられるので、プライバシーの保護に留意するとともに、それぞれの家庭の事情、特に生育歴や家族構成などに十分配慮することが必要である。」とされている。

「家族」にしる「自分自身」にしる、学習活動とは言え、家庭生活や成育歴等のプライバシーに触れていくことになる題材である。これらの学習活動を進めていく上では十分な配慮が必要であることは当然である。

しかし、そうした一般的なプライバシーへの配慮とともに、現代日本社会が抱える様々な家庭状況も念頭に置かなくてはならない。現代日本においては、以下のような家族の実態が指摘されている。

- ・一人親家庭の児童が少なからずいる<sup>3)</sup>。
- ・社会的養護児童を支援する家庭や施設から通学している児童がいる<sup>4)</sup>。
- ・一人親家庭の就業のみならず二人親家庭でも共働きの家庭の児童が増えている<sup>5)6)</sup>。
- ・子どもの学習に関わる時間の確保が困難な家庭が少なくない、ないしは保護者の子どもの学習に関わる関心が低い家庭の児童がいる<sup>7)</sup>。
- ・同居家族によって虐待されている可能性がある児童がいる<sup>8)</sup>。
- ・同性愛カップルによって育てられている児童がいる<sup>9)</sup>。

現実的数値で見ても<sup>3)</sup>、児童のいる家庭のうち「三世帯世帯」は14.2%だけで、「夫婦と未婚の子のみの世帯」は75.1%である。その一方で、「三世帯世帯」「夫婦と未婚の子のみの世帯」でない「ひとり親と未婚の子のみの世帯」「その他の世帯」が合わせて10.7%もある。また、「三世帯世帯」「夫婦と未婚の子のみの世帯」であったとしても、本稿3(1)で見てきたような「にこにこ」「えがお」「あんしん」「たのしい」という明るい家族像とは言えない家庭で暮らしている児童もいる。

## ② 十分な児童の実態の把握

本稿5(1)①で見た実態から、「家庭生活」「自分自身」の学習における学習計画と実際の展開においては、機械的に教科書通り進めてはならず、学習するクラス、学年、地域等の実態を十分に踏まえ、どのような内容を、どのように扱うのか、場合によっては扱わないのかを慎重に判断して学習計画を立て、展開していく必要がある。

第1に大切なのは、十分な児童の実態把握である。

年度当初に各校では「家庭環境調査書」等の名称による基本調査を行っている。この記入を巡っても、「個人情報保護の観点でどこまで書くのか」「使用の目的は何か」など、記入する側の保護者の戸惑いもインターネット上で見られる<sup>10)</sup>。よって、どこまで保護者が書き込むか、どう情報提供するかは保護者の考えに委ねられている。それでも一定の家庭状況を把握することは可能である。

しかしながらそれだけでは十分とは言えない。大切なのは、日常的な児童との関わりである。根掘り葉掘り聞き出すような行為はしてはならない。それは結果を焦ってかえって児童を無口にしてしまいかねないからである。最も大切なのは、何でも気軽に話せる信頼関係を築くことである。

同時に、保護者との日常的なコミュニケーションに努めることも大切におこなってはならない。かつては「家庭訪問」を年間行事計画に組み入れていた学校が少なくなかったが、「授業時間確保」、「教師の多忙化解消」、受け入れる側の「保護者の負担軽減」など

の事情があって、今は聞かれない。その分「個人面談」が増えているようである。しかし、数日で全家庭の保護者と懇談するため、慌ただしくやりとりしなくてはならない。日頃から何でも気軽に話せる信頼関係を、保護者との間でも築いておくように心がけることが大切になる。

こうして十分な実態把握に努めることが、「家庭生活」「自分自身」をその当年度、どのように取り扱っていくかの基礎情報になる。

### ③ 学習年度の家庭状況を踏まえた学習計画の吟味

全ての学校で「年間学習計画表」が作られている。各校各学年では、その年度の様々な実態を考慮して、その年度なりに「年間学習計画表」にある学習項目を展開していくのが一般的である。

しかし、本稿5(1)①で見てきたように、「家庭生活」「自分自身」については、プライバシーに関わる内容であることに加えて、現代日本の家庭状況も踏まえなくてはならない。そのためにも、学習計画を確認していく際に、学習する年度の児童家庭の状況をしっかりと確認し、「年間学習計画」で学習単元の展開を確認した際に支障になる事情がないかを確認する必要がある。そして、その事情によっては、軽く扱う、ないしは部分的に扱わないことも勇気をもって決断する必要がある。その場合には、事前に教務主任・教頭・校長等、可能ならば職員会議等の場で、「年間指導計画表」通りには進められない事情を説明し理解してもらおう手立ての慎重さも踏まえておくことが大切である。

### ④ 事前の保護者理解

②③で見てきた過程を踏まえて教科書にあるような展開で学習を進めていくことにした場合にも、さらに慎重を期す必要があると考える。それは、本稿3及び4で見てきたような、教科書における「家庭生活」「自分自身」の扱いを学習していく際に、本学習活動における家庭の理解の上での協力が欠かせないからである。

「自分自身」を題材にした学習に「たんじょう」という単元で臨んだ松本あゆみ<sup>11)</sup>、「自分自身」及び「家族」を題材にした一連の学習「自己紹介」「家族紹介」「家族の人のお仕事調べ」に取り組んだ和田仁<sup>11)</sup>のいる学校では、学年教育講座を設け、学習活動に先行してその学習活動の意味や学習計画を伝え、児童の聞き取り等に向けて心構えや準備をしてもらえるようにしている。

事前に保護者に理解を得る試みは、保護者を児童の学習活動の理解者・協力者として位置付けていく点でも大事である上に、定義に差異が生じかねない歴史教育や性教育等を扱う際などに、学習が深まる段階で認識の違いから抗議を受けるケースがあることも踏まえておかななくてはならない。学習活動が始まってからそのような事態に遭遇しては、教員のみならず児童にも支障が出てしまう。そのためにも、特に定義に差が生じそうな学習内容

については事前に説明し理解を得ておくとともに、必要な協力で円滑に関われるよう事前に準備しておいてもらう配慮が必要である。

## (2) 「家事」を取り上げることの今日的検討課題

### ① ジェンダーフリー化の中での家事分担の扱い

本稿3(1)で示した「家庭生活」を取り上げた単元の教科書を見た場合に、父親も育児、調理、食器洗い、靴揃え、布団畳み等に参加している様子を積極的に写真や絵で示している教科書もある一方で、G社は父親が風呂掃除している姿と子どもとともに過ごしている姿、M社は一緒に食事する、会話する父親の姿にとどまっている。

ジェンダーフリー化が進む中で、より一層家事、及びその仕事を現実的に担っている人に着目し、1人にその仕事が偏らぬよう、様々な状況を家族を構成するみんなで理解し合い、分担し合えるようにしていくべきである。教科書では家族のみんなを喜ばす活動として「ニコニコ大作戦」の名称で、家事にチャレンジさせていく構成の教科書がある。しかし、その家事を学習活動しているその時だけに留めず、長く続けていけるようにしていくためには、その日の就労や学習、時には健康状況等の家族構成員の状況に合わせて、家事を分担し合うために家族で話し合うことが大切である。そうした場面を意識的に盛り込むべきではないだろうか。

### ② 社会の便利化による「家事」定義の問題

本学が設けている「教科・保育表現技術 生活」の授業で、「家事を見つめる」生活科の授業のあり方を学生に考えさせた際、時代が進化し、さらにAI化が進むことで、かつての「家事」が今では「家事」と言えなくなっている仕事が出てきていることを認識させられた。以下は一例である。

- ・ ご飯炊き 火を起こすところから始める → スイッチ一つで炊飯
- ・ 食器洗い 手で洗う → 食器洗い機を使う
- ・ 洗濯と乾燥 洗濯板に物干し竿 → 洗濯機で物干し竿 → 乾燥までの全自動洗濯機
- ・ 部屋掃除 箒・ちりとり → 電気掃除機 → 全自動掃除機

これらは電化製品として普及してきている。アイロボットジャパンが実施した「掃除の未来に関する意識調査」<sup>12)</sup>によれば、自動化したい家事の上位3位として「掃除」「食器洗い」「洗濯」を挙げており、さらに「15年後には、一般家庭の掃除をロボットが担うようになると思いますか」に対して88.6%が「yes」と答えたという。AI化が進む中で「家事」としての仕事は残るにしても、家族が分担して行う仕事としての「家事」が今後なくなる可能性がある。また、「一億総活躍社会」と言われる中で、また余暇を大切に過ごしたい人など様々な思いから、「家事」を負担に思う人が増えて来ている<sup>13)</sup>のも現実である。AI化が進むことでの「家事」負担軽減の流れが加速する可能性もある。時代の深化とともに

「家事」のあり方が変わっていくことも踏まえておく必要がある。

### ③ 様々な家庭状況による学習活動における配慮の必要

筆者はかつて小学校教員として勤務していた経緯があり、生活科でこの「家庭生活」を題材にした学習活動を展開してきた経験をもつ。その際、「家事」を深く扱うことをやめた年が実際にあった。そのように判断をしたのは、学校を休みがちで、登校してくる姿は衣服が汚れ、夏は体臭等が気になる子を配慮してのことであった。連絡なく休みが続いた際に何度か家庭訪問し、様子を見に行ったことがある。すると、開けられたままの玄関に、足の踏み場もないほどに埃にまみれた靴が折り重なっていたのが見えた。声をかけると母親に勧められ、部屋に上がらせてもらった。今度は、足の踏み場をようやく見つけるような状態で、食べ物や食器、衣類などが散乱していた。その家庭は、父親が自営で働き詰めで、母親が心身を病んでおられ、ほとんど養育ができていない状況であった。学年教員集団も校長等もその状況を把握していたので、授業としての「家事」は深く立ち入らないことに理解を示した。

「家事」を扱わなくてよい、ないしは軽視してよいと考えている訳ではない。その「家事」を授業で扱う場合には、個々の児童がどう受け止めるかが家庭環境で微妙に違い、良かれと思って深めた学習が、かえって事情ある家庭にとっては困難を生じさせ、児童が苦しんでしまう事態を避けなければならない。「家事」を見つめ、積極的に関わろうとする態度は大切なことである。しかし、「授業で扱う」ことは、時として一律の教えとして個々の家庭状況に沿わないことを押しつけてしまう危険があることを教員は十分踏まえ、だからこそ慎重に扱うことが必要なのである。

### 参考文献

- 1) 参考にした教科書は2019（平成31）年度に使用されている以下である。  
学校図書『みんなとまなぶ しょうがっこう せいかつ』上下  
教育出版『せいかつ』上下  
啓林館『わくわく せいかつ 上』『いきいき せいかつ 下』  
信州教育出版社『せいかつ』上下  
大日本図書『新版 たのしい せいかつ』上下  
東京書籍『新編 あたらしい せいかつ』上下  
日本文教出版『わたしと せいかつ』上下  
光村図書『せいかつ』上下
- 2) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016（平成28）年12月21日 中教審第197号
- 3) 厚生労働省「平成30年度 国民生活基礎調査の概況」の「結果の概要」「I 世帯数と世帯人員の状況」「4 児童のいる世帯の状況」「表5 児童数別、世帯構造別児童のいる世帯数及び平均児童数の年次推移」から、核家族世帯のうち6～7%が一人親世帯であることが分かる。

- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局「児童養護施設入所児童等調査結果（平成25年2月1日現在）」の「結果の概要」「I 児童の現在の状況」「5 児童の就学状況」から、小学1～3年生の7,289人が全国の里親家庭、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、母子生活支援施設、ファミリーホームから通学していることが分かる。また、同「II 委託（入所）時の家庭の状況」「1 養護問題発生理由」には、「死亡」「行方不明」「精神疾患」「入院」「拘禁」「経済的破産」「就労」「夫婦の不和」「放任」「遺棄」「虐待」等の理由が挙げられている。
- 5) 3)の「結果の概要」「I 世帯数と世帯人員の状況」「4 児童のいる世帯の状況」「表6 末子の母の仕事の状況の年次推移」から、2018（平成30）年度統計での末子の母の就労は72.2%で、2004（平成16）年度統計の56.7%以来年々増え続けていることが分かる。
- 6) 独立行政法人 労働政策研究・研修機構 調査シリーズ No. 175「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査2014（第3回子育て世帯全国調査）」「調査結果の概要」「IV 調査結果の概要」「3 経済状況」「(3) 収入源」から、二人親家庭でも、世帯主の収入のほかに配偶者の収入ないしは児童手当に頼らざるを得ない経済状況が見える。このことから共働きせざるを得ない家庭が少なくないことが推察できる。
- 7) 同上 調査シリーズ No. 192「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査2018（第5回子育て世帯全国調査）」「調査結果の概要」「V 主な調査結果」「4 家事・育児」「(7) 子どもの勉強をみる」から、「ほぼ毎日みる」は二人親世帯22.4%、母子家庭14.2%、父子家庭11.%にとどまり、「めったにない」に至っては二人親世帯35.1%、母子家庭41.8%、父子家庭38.9%もの高率であることが分かる。
- 8) 厚生労働省は、2019（令和元）年8月1日に「平成30年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数（速報値）」を発表した。それによれば、2018（平成30）年度中に、全国212か所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は159,850件で、過去最多であった。しかし、この数値は、地域等からの通報や警察からの通告等で「児童相談所が相談を受け、援助方針会議の結果により指導や措置等を行った件数」である。2007（平成19）年1月に改訂された「子ども虐待対応の手引き」の「第2章 発生予防」「3. 発生を予防するためには、どのような支援が必要か」「(1)リスク要因を持つ家庭への支援」では、「リスク要因」として3つ挙げている。1つ目は妊娠、出産、育児を通しての保護者自身の身体的・精神的な不安定や不健康、2つ目は未熟児や疾病、障害を抱える児童の育てにくさ、3つ目には経済不安、夫婦不和、配偶者からの暴力等による家庭の不安定を挙げている。このことから、速報値の数値は氷山の一角で、通報・通告等されずに明らかになっていない家庭内での虐待がまだまだあるのではないかと考えざるを得ない。
- 9) 榊原良江「育児・子育て希望者の多様化がもたらす課題：同性愛カップルの事例から」2007年 日本生命倫理学会誌『生命倫理』通巻18号 pp. 223-232。筆者は「先進国では、同性愛者の家族形成に対する法整備が進んでいる」一方で、日本では「当然ながら当事者たちへの法整備は進んでいない」（以上 p. 224）現状を問題視し、「今後、私たちは、同性愛者の育児に際し、それらを受容することが迫られるであろう」（p. 231）と主張されている。
- 10) Yahoo! 知恵袋「家庭環境調査書に関する Q&A」参照。
- 11) 鎌倉博・船越勝編著『新しい教職教育講座 教科教育編 5 生活科教育』2018年 ミネルヴァ書房所収の松本あゆみ「第11章 自分の成長を見つめる——「誕生」の学習」の pp. 170-173「この学習で大切にしたいこと」及び和田仁「第12章 家族を見つめる——様々な家族の中で学ぶ」の pp. 190-201「配慮すべきこと」参照。
- 12) アイロボットジャパン PR 事務局調べ「掃除の未来に関する意識調査」（インターネットリサーチに

より2017年5月18日～19日に応募した全国の20～59歳の男女800人分のサンプルでの結果)

- 13) マイボイスコム株式会社「家事に関するアンケート調査（第4回）」(「MyVoice」のアンケートモニターによるインターネットリサーチにより2019年8月1日～8月5日に応募した10,116人)で日常の家事を負担に感じる層(「負担に感じる」「やや負担に感じる」の合計)は4割強だったとされている。